



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
発行所 © 1988
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

《四旬節》

心の奥底へ 入り込む

1 「右の手でしていることを左の手にも知らせぬようにせよ。(マテオ6・3)

山上の説教で、キリストは善行についてこのようにお教えになりました。「それはあなたにする施しを隠すためである。」

「左の手にさえも知らせぬようにせよ……」つまり、他人に善を行なう時には、自分のことを忘れよという意味です。忘れるのです。うわべだけでなく、心から善を行なおうと望むなら、(私)の心をふり捨てれば、成しつづつある善に専念することが出来ます。自己心から逃れてください。あなたのしていることが他の人の助けとなり、贈りものの論理に忠実であることを願うなら。

2 四旬節の始まりである灰の水曜日にあたり、私たちは自ら施し、祈り、断食——の持

つ内的真実に目を向けるよう求められています。それに加えて、この聖書の一節は、特に善行——信心行為への呼びかけとなっています。従って、どの業にも内的真実は不可欠です。それらの業を、神に捧げるものとする事ができるように。

今こそ特別の 改心のとき

3 なぜ、そうしなければならぬのでしょうか？ 改心の時である四旬節が、今日始まるからです。

改心は、私たちが何者であり、何をすべきか、ということについての真理を再確認する行為です。内的真実という点から見れば、改心とは自らの心と良心の(奥底)へ入り込むことですが、自らを二つに分裂させるのではなく、むしろより一層、神に向かって自分自身を開くことを意味しています。原罪のあと、愚かにも、私たちの自我が神を否定し、神から奪い去った場合、神のため準備するということなのです。

4 こうして神に向かって心を開くなら、期せずして次のような言葉が口をついて出るようになります。ごめんなさい！ 赦してください！ 私を洗い、罪から清めてください！ 清い心をお与えください！ これらすべては、神との契約がもたらすすばらしい実りなのです。ダビドの詩篇51節には、以上述べた事柄が美しく、簡潔に述べられています。

5 詩人にして預言者、罪を犯した王であるダビドが語りかけた(神)とは、何者でしょうか？ 「心をあげて、私に立ちもどれ(ヨエル2・12)」と仰せになる神とは？ 「ご自分の地を慈しむ(ヨエル2・18参照)ことを示される御方では

うか？ 「罪を知らなかった」御子を「私たちのために罪となされた」コリント②5・21参照)あの神御自身ではないのでしょうか？

6 この真実、この現実、教会という生きた組織体と、人間の心の奥深くで脈打っています。ほかならぬ今、四旬節のこの期間に。そこで自己を忘れ去る(右の手でしていることを左の手にも知らせぬように)ことが必要となってくるのです。心の中に、神の入れる場所を用意しなければなりません——改心の場を——、この驚くべきすばらしい現実にも心も没入することができるよう。

神は私たちのために御子イエズス・キリストを罪に定められ、御子を通して私たちが「神の正義」(コリント②5・21)となることができるようにしてくださいました。これが恩寵と言われるものです。恩寵の内には

7 「自己」から一歩も出ようとしない人間には、この現実が理解できません。自分は絶対に正しいと思いついでいる人、自己満足にひたり、個人や集団が積み重ねてきた経験をばかにする人——このよう

な人々にもわかりはしないでしょう。四旬節にあたり、私たちの経験しつつある恩寵という現実を力強く宣言しましょう！ 今は(恵みの時)、全ての土台となる真理をあらわす時、根元からの呼びかけの時です。聖霊の偉大な御力(Seruitum cordis)が(弱さ)すなわち神の御子の受難と死去を通して、使徒の言葉を借りれば「愚かなる十字架のことば」(コリント①1・18参照)を通して、示される時なのです。

実際、神の御力は「弱さのうちに完成される」(コリント②12・9)

家族は 愛と生活と 祈りの共同体

「ダビドの子ヨセフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。(マテオ1・20)

これはダビドの子孫聖ヨセフの生涯において要となった言葉です。この言葉をもって永遠の父なる神は一人の男——ナザレトの木工——に神の偉大なる神祕を委ねられました。この神祕は、同じナザレトの町の

処女に最初に託されました。御告げの神祕の時、マリアとヨセフの婚約はすでに公になっていました。イスラエルの法によればマリアはヨセフの配偶者であったのですが、まだ彼の家では暮らしていませんでした。自ら天使に話しているように、彼女はまた男を知らなかったのです。(ルカ1・34参照) そしてこのマリアに

まず第一に、託身の秘義が託されました。(父なる神と同質の)御子についての神秘なのです。神の永遠なる聖旨を成就するために、神の子は聖霊の力によって人となりました。ナザレトの処女はその母となるべく選ばれたのです。



こうして託身の秘義は誰よりも先にマリアに託されたのでした。マリアの内に「みことばは肉体となり」(ヨハネ1・14参照)、御告げのとき彼女は、人には不可解な神の企てに自らの意志を委ねました。ですからまずマリアが、幸せな者と呼ばれるのに値するのです。「ああしあわせなこと、主から言われたことの実現を信じた方は。(ルカー1・45)この時より、マリアは代々の人々から幸いな者と呼ばれるのにふさわしい御方だったので。(ルカー1・48参照)

ヨセフはマリアの次に、マリアと共に同じ神の神秘に与ったのであり、本日の典礼で読まれる福音書は「おこそかにこのことを証言しています」。「ダビドの子ヨセフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。マリアは聖霊によってみごもっている。彼女は子を生むからその子をイエズスと名づけよ。なぜなら彼は罪から民を救う方だからである。(マテオ1・20-21) (イエズス) という名前は「神が救う」という意味で、従って「救い主」となるのです。マリアと同じように、ナザレトの大工ヨセフにも、同じ神の神秘が託されました。大いなる神秘、神の内にも永遠に隠されている神秘、人間の歴史において「肉体となった」神秘

信仰の人

が人の心、信じる者の目に明らかにされたのです。

マリアについて、いとこであるエリザベトは「信じたあなたは幸せです」と言いましたが、同じことがヨセフにもあてはまります。実際、本日の典礼においてヨセフの信仰はアブラハムの信仰にたとえられています。使徒パウロはアブラハムを私たちの信仰の父と呼んでいます。(ローマ4・16-18参照)「私はあなたを多くの民の父と定めた」とローマ人への手紙には書かれています。(ローマ4・17) 事実、アブラハムの信仰に耳を傾けているのは

キリストの教えは 親から子へ



旧約に従う人々、イスラエル人、キリスト教徒のみならず、イスラム教徒もそうなのです。

ナザレトの謙虚な大工であるヨセフはこの信仰を受け継いでいます。同時に、アブラハムを通じてすでにイスラエルの民に知られていた神は、まずマリアになさったように、アブラハムにはお示しにならなかった神秘をヨセフに明らかにされました。旧約聖書は何世代にもわたって徐々にこの神秘を準備していったのです。イスラエルの子、正しい人であるヨセフは神の聖なる神秘を託されました。この神秘は現実となってヨセフの生活に入り込み、マリアを通して彼の家の屋根の下で実現しました。ヨセフは神から託された神秘に忠

皆さんがた御両親は、子供たちにとって最初の重要な教育者ですし、またそうでなければなりません。愛において、愛を通じて新しい人間を生み出し、そして子供たちが真に人間間的なキリスト者としての生活を送ることができるよう、適切な手助けをする務めがあります。家庭は、特に今日、すべての社会および政府機構が必要としている人間としての徳と社会的な徳とを教える、最初の学校なのです。「教育を授けるといふ親の権利と義務は、人間の生命を伝えることと関係して夫婦にとつて(本

今日、三月十九日、全教会はナザレトのヨセフのまわりに集まります。教会はヨセフの信仰の素朴さと深さを称えます。彼の公正さ、謙虚さ、勇気を賞賛し崇敬します。ナザレトの職人としてつましく目立たない生活を送っていたヨセフに、神は何と価値あるものを託されたことでしょうか。神はヨセフに御自身の永遠の御子を託され、イエズスはヨセフの家において人の子に關わることをすべてを受け入れられました。神はヨセフにマリアを、その処女性と母性——処女でありながら母親となるマリア——を委ねられました。神はヨセフに聖家族を委ねられたのです。神は創造の全歴史の中で

やりと利他的な奉仕という真の愛を子供に教えること。キリスト教信仰の崇高な価値、すなわち父なる神とその御子キリストと聖霊の信仰に導くこと。カテケジスの最初の場合は家庭でなければなりません。父や母、兄や姉から、子供はキリスト者としての模範的な生活と共に、神の啓示についての知識を得ますが、それは教区やさまざまな機関・活動における系統立った要理教育によって深められます。

最も神聖なるものをヨセフに委ね、またこのつましい大工は神の信頼を裏切らなかつたのです。ヨセフは永遠の神御自身にならつて、最後の最後まで忠実を保ちました。思慮深く慎重な態度で、全てに心をくだいていたのです。

こうしてヨセフは全教会が信頼を置く人となったのです。これは教会の全生活と、教会の地上での使命にかかわるすべてに關係しています。教会が福音に従って奉仕する人間生活の二つの大きな分野、すなわち家族生活と人間としての仕事という分野に、特に關係しています。

そして、家族生活と人間としての仕事は密接に結びついているのです。(聖ヨセフの祝日 三・十九)

必要とされているのは、特に日曜日と祝日のユーカリスチア(御聖体)やその他の秘跡、とりわけ入信の秘跡にキリスト者である家族全員が積極的に参加することです。

ここに集うすべての家族、そして大司教区の家族全員を、ナザレトの聖家族の御保護のもとに委ねます。人となられた神の子キリストは、この聖家族の間で長年のあいだ生活をなさったのです。

(義人)であり、聖母マリアとイエズスを愛情深くいたわり見守った聖ヨセフが、皆さんがたを毎日の労働において支えてくださいますように。聖母マリアが、御自身にならつて私たちが常に神の御言葉と聖心にすすんで従うことができるよう、救い主より力を授けてくださいますように。

今日、三月十九日、全教会はナザレトのヨセフのまわりに集まります。教会はヨセフの信仰の素朴さと深さを称えます。彼の公正さ、謙虚さ、勇気を賞賛し崇敬します。ナザレトの職人としてつましく目立たない生活を送っていたヨセフに、神は何と価値あるものを託されたことでしょうか。神はヨセフに御自身の永遠の御子を託され、イエズスはヨセフの家において人の子に關わることをすべてを受け入れられました。神はヨセフにマリアを、その処女性と母性——処女でありながら母親となるマリア——を委ねられました。神はヨセフに聖家族を委ねられたのです。神は創造の全歴史の中で

不変の教え

指して「人の子」(マテオ16・28、マルコ2・28参照)という表現をお使いになりました。この称号は旧約の救い主の伝承に由来するものですが、それは同時にイエズスのお望みである(信仰を伝える)という目的に役立つものでした。イエズスは、弟子や聴衆みずからが、人の子が真の神の子であることを気づいてほしいとお望みでした。前にも述べたように、フィリッポのカイザリア地方でのペトロの信仰告白の中にはこれがよく表われています。イエズスが弟子たちに問われると、ペトロはイエズスが神であることをはっきりと認めました。そこでイエズスはペトロを「幸いな人」と呼び、その答えが「血肉からのものでなく」天にまします父」によるものであると仰せになつて、ペトロの証言を確認なさいました。(マテオ16・17参照) 子であると宣言するのは御父です。御父だけが御子を御存じなのですから。(マテオ11・27参照)

このように、イエズスは慎重に真理を明かしてゆかれたのですが、神の子についての真理は、イエズスの御言葉と御業の光をうけて徐々に明らかになっていきました。しかしある人々にとってはそれが信仰の対象となり、他の人々にとっては矛盾となり非難の対象となりました。この点があらわになったのは、取り調べのときでした。マルコの福音書を読んでみましょう。「大祭司は『おまえはキリストか、祝されたものの子か』と尋ねた。イエズスは、『そのとおりである。あなたたちは人の子が力あるもの右に座し、天の雲に乗り来るのを見る』と言われた。(マルコ14・61〜62) またルカの福音書によると、質問の仕方が次のようになっています。「すると、あなたは神の子ですか」と言ったので、イエズスは『その通り、私がそれだ』と答えられた。(ルカ22・70)

対決

このお答えに対する反応は一致していません。「この男は冒瀆を吐いた。…みなも今冒瀆のこたはを聞いた。…この男は死に値する。(マテオ26・65〜66) いわゆる旧約の律法の現世的解釈から起こる非難でした。

「主の名を汚す者は、死罪に当たる。集団はみんな、その者を石殺しにする」とレビの書にはっきりと記されています。(上掲書24・16) ナザレトのイエズスは、旧約の代行者の前で真の神の子であることを宣言なさったのです。それは、彼らの信じるところによれば、冒瀆に相当することでした。こうして「彼は死罪に当たる」と宣告され、判決が執行されました。旧約の掟による石殺しの刑ではなく、ローマの法律による十字架の刑でした。イエズス御自身が(神の子)であると表明することは、神であると宣言することであり(ヨハネ10・33参照)、旧約の唯一の神を信じている人々のうちに徹底的な反対を引き起こす結果となったのです。

イエズスに対して、結局最後に法的訴訟が起されたのですが、それは福音書、特にヨハネの福音書に記されているように、あらかじめ予期されていたことでした。イエズスの話を聞いた聴衆が、冒瀆に当たるとしてイエズスを石殺ししようとする場面がいくつか記されていますし、また良い牧者の章(ヨハネ10・27〜29参照)ではイエズスの御言葉が冒瀆と解釈されたことが記されています。「私と父とは一つである(ヨハネ10・30)とイエズスが仰せになると、ユダヤ人たちはふたたび石を取り上げてイエズスを殺そうとした。イエズスは「私は父から来る多くの善い行ないを見せたが、それらのどの行為のために石殺ししようとするのか」と尋ねられた。ユダヤ人たちは「石殺しにするのは善い行ないのためではない。冒瀆のためだ。人間なのに神と名のるからだ」と答えた。(ヨハネ10・31〜33)

「私は存在する」の意味

キリストがはっきりと仰せになった「私は存在する」という御言葉は特に意味深いもので、汝の名は何かと尋ねたモーゼの問いに自らお答えになった神の御言葉に結びつくものです。「私は(在すもの)(存在するもの)である。…イスラエルの民にこう言え、(在すもの)(存在するもの)が、私をおまえたちにお遣わしになったのだ」と(脱出の書3・14)。「私は存在する」という同じ表現を、キリストはとても重要な意味でお使いになりました。例えば「アブラハムが存在する以前に私は存在する」と言われたように。また次のようにも言われました。「もし私がそれだと信じないなら、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬ。(ヨハネ8・24)「あなたたちが人の子を上げてのち、私が(それ)だったと知る。」「今から、そのことの起こる前に私はこう言う。そのことが起こるとき、私が何者であるかをあなたたちに信じさせるためである。(ヨハネ13・19)

「アブラハムが存在する以前に私は存在する」と言われたように。また次のようにも言われました。「もし私がそれだと信じないなら、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬ。(ヨハネ8・24)「あなたたちが人の子を上げてのち、私が(それ)だったと知る。」「今から、そのことの起こる前に私はこう言う。そのことが起こるとき、私が何者であるかをあなたたちに信じさせるためである。(ヨハネ13・19)

イエズスは御自分を(人の子)と称されましたが、その御業と御教えは、イエズスが神の子であることを証明するものでした。すなわち、神なる御父と一体である御子は、また神であることを証明するものでした。しかしこのように証明された明白な真理の受け取り方は、二つに分かれました。ある人々はイエズスを認め

受け入れられました。「多くの人が彼を信じた。(ヨハネ8・30など) しかし驚いたことに他の人々は激しく反対し、旧約の律法にのっとり冒瀆の罪で訴えたのです。


「私は存在する」という御言葉は特に意味深いもので、汝の名は何かと尋ねたモーゼの問いに自らお答えになった神の御言葉に結びつくものです。「私は(在すもの)(存在するもの)である。…イスラエルの民にこう言え、(在すもの)(存在するもの)が、私をおまえたちにお遣わしになったのだ」と(脱出の書3・14)。「私は存在する」という同じ表現を、キリストはとても重要な意味でお使いになりました。例えば「アブラハムが存在する以前に私は存在する」と言われたように。また次のようにも言われました。「もし私がそれだと信じないなら、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬ。(ヨハネ8・24)「あなたたちが人の子を上げてのち、私が(それ)だったと知る。」「今から、そのことの起こる前に私はこう言う。そのことが起こるとき、私が何者であるかをあなたたちに信じさせるためである。(ヨハネ13・19)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

「教皇様の声」専用保存ファイル発売中

- 「教皇様の声」が約3年分保存できます。
- ポリプロピレン樹脂製・ブルー 金文字装丁
- 定価700円 (1~2冊・240円 3~4冊・350円 5冊以上・600円)

ご希望の方は、〒659 芦屋市船戸町12-6 (財) 精道教育促進協会「教皇様の声」係までお申し込みください。



郵便振替 神戸 3-72393